

学ぶ

キャリアファイル

プロ野球のスカウト



才能の原石 直接見て発掘

プロ野球中日ドラゴンズのスカウト一筋38年。立浪和義監督ら数多くの名選手を入団に導いた中田宗男さん(65)が今年1月、一線を退いた。各地を飛び回り、高校生や学生ら才能の原石を発掘する地道な仕事の裏側を、学生スタッフが直撃。プロの世界に身を置いてきた名スカウトは、若者に向けてこんなメッセージをくれた。常に自分に課題を与えるべし。

元中日ドラゴンズスカウト 中田宗男さん(65)



なかつ・むねお 1957年、大阪府和泉市出身。上宮高から日本体育大を経て、79年にドラフト外で中日に入団。1軍の投手として5年間で通算7試合に登板し、1勝0敗。84年からスカウトに転身し、関西地区を担当。立浪和義さん、今中慎二さん、福留孝介さんら名選手の獲得に携わる。チーフスカウト、スカウト部長などを務め、今年1月に退職。新聞各紙のドラフト関連記事でもおなじみの存在だった。

「野球の天才だ」。二年後にドラフト一位で中日が指名した選手は、約十年にわたってチームの主力を務めることになる。ミスタードラゴンズとして立浪監督だった。

「一万人が何年間も低迷すると、スカウトも批判の対象になる。過酷な仕事を続けられたのは、野球愛とチーム愛があったから。ドラフトは必ずいいチームである分かってほしい。その一心だった」と振り返る。

「一軍を持つ人々へメッセージはありますが。学生スタッフの質問に、中田さんは答えた。『現状に満足せず、自信を持つことで意欲的に取り組むことに人生をささげよう』」

プロの世界は、学生スタッフたちが想像するよりもはるかにシビアだという。一握りのスターが世間の注目を浴びる一方で、大多数は才能を磨ききれずに表舞台を去る。だからこそ「負けたくない」という気持ちで、自分を磨き続け、自分を磨き続けなければならない。意欲を保てないなら、いっそ別の道へ進んだ方がいいと。

「勝ち残らなければ、希望通りにならない。常に自分に課題やプレッシャーを与える環境に身を置くこと。中田さんの口から出てくる言葉は、一語一語がすしりと重かった。

父・岩佐一秀、山本健人、構成・杉浦正志

次回は六月十日付、小学生記者です。

常に自分に課題与え成長



中田さん(左)と取材した学生スタッフ(右) 中日新聞社

取材レポート

安藤詩織(名古屋大2年) 自分の現状に妥協せず、常に自身をプレッシャーの下に置くべきだというお話が印象深かった。何かと理由をつけて、やりたいことを諦めてしまおうかと悩んでいた自分の胸に、深く刺さった。

池内友音(愛知教育大4年) 「すごいな!」という素直な感性を大切にすることで、その人の良さが見えてくると知った。芸術や文化などに対してはまるまる。もっと感性を磨き、人や物事にまっすぐ向き合いたい。

岩佐一秀(同志社大3年) 「自分の物差しを持つ」。誰かと比較するのではなく、素直に良いと思える選手をスカウトすることが、成功につながった。自分の価値観を大切に、納得のいく決断ができるようにしたい。

黒田桃花(福山女学大4年) 「常に自分に課題を与えていく。人生を生き抜く中でこの言葉を大切にしたい。大切なのは、自分を知り、技術を突き詰める力。良い時も悪い時も自分に対しての反省を忘れずにいたい。

山本健人(名古屋大2年) 取材前はスカウトの仕事についてよく知らなかったが、日本中が熱狂する選手を見極めるすごい職だと感じていた。中田さんにも苦悩や迷いがあったと知り、悩むのはみな同じだと勇気をもらった。